

おじいさんとくわ

小川未明

青空文庫

だんだんと山やまの方ほうへはいってゆく田舎いなかの道みちばたに、一軒けんの鍛冶かじ屋やがありました。その前まえを毎日まいにち百姓しやうとが通とおつて、町まちの方ほうへゆき、
 帰りかえには、またその家うちの前まえを通とおつたのであります。

「どうか、今年ことしも豊作ほうさくであつてくれればいいがな。」と、話はなしを
 してゆきました。

家いえの内うちで、おじいさんは、その話はなしし声こゑを聞きいていました。そし
 て仕事しごとをしなが

ら、「どうか、米こめや豆まめが、よく実みつてくれるように。」と、鉄てつを打うつ
 て、百姓しやうとのつかうくわなどを造つくつていました。

おじいさんは、できあがつたくわを、店みせさきにならべておきま

した。百姓しやうは、みんなこの店みせで、くわや、かまを買かって行くので
す。

「もう、くわの刃はもへったから、新あたしいのを買かって帰かえろう。」と、
ひとりひとりの百姓しやうは、店みせさきに並ねべられたくわを見みていいました。

「ああ、そうだ。私わたしも買かってゆこう。」

「うちのくわも、だいぶん古ふるくなつたから、俺おれも買かってゆこう。」
と、またほかの百姓しやうが、いいました。

おじいさんは、話はなしの好すきな、いい人ひとでありました。

「このくわは、私わたしが念ねんをいれて、どうか今年ことしは豊ほう作さくであつてく
れるようにと、神かみさまに祈いのつて造つくつたくわなんだから、なかなか
しつかりできている。」と、おじいさんはいいました。

百姓しやうは、そこにあつたくわを手に取とつてながめました。

「なるほど、しつかりしている。」と、百姓しやうはいいました。

そして、めいめいが、そこにあつたくわを買かつて歸かえりました。

おじいさんは、自分じぶんの念ねんをいれて造つくつたくわが、百姓しやうの役やくにたつのを喜よろこんでいました。

「あのくわなら、だいじようぶだ。」と、おじいさんは、百姓しやうがまいにちてちから毎日まいにち手に力ちからをいれて、田たや圃はたけで、くわを振ふり上あげるようすを思おもつて、独ひとり言ごとをしました。

すると、ある日ひのこと。いつかくわを買かつていった百姓しやうが、はいつてきました。

「今日こんにちは。」

「おじいさん、せんだって買^かっていったくわは、まことにいいくわだが、重^{おも}くて、手^てがくたびれます。もつと軽^{かる}くして、造^{つく}ってください。」といいました。

おじいさんは、「はてな。」と、頭^{あたま}を傾^{かたむ}けました。どうして、そんなに重^{おも}いだらう？

「ああ。わかった。私^{わたし}は、あのくわを造^{つく}るときに、米^{こめ}や、豆^{まめ}が、たくさん実^{みの}つてくれるようにとばかり思^{おも}っていた。それだからだ。」

おじいさんは、うなずきました。

「こんど、軽^{かる}いくわを造^{つく}ってあげましょう。」といいました。

「どうか、そうしてください。」と、百^{しやう}姓^うは、頼^{たの}んで帰^{かえ}りました。

おじいさんは、仕事場で、どうか軽くて、百姓が疲れないように！ と心で祈りながら、鉄を打ち、くわを造りました。

「これなら、手の疲れるようなことはない。」と、おじいさんは、できあがつたくわを取りあげて喜びました。

百姓は、やってきました。そして、そのくわを取りあげてみました。

「これは、軽くて、いいくわだ。」と、喜んで持って帰りました。

「あれなら、だいじょうぶだろう。」と、おじいさんは思いました。

ある日のこと、また、いつかの百姓がやってきました。

「おじいさん、あのくわは、まことにいいくわですが、あまり軽いので、手^てごたえがなくて困^{こま}ります。もつと、いいくわを造^{つく}ってください。」といいました。

「はてな。」と、おじいさんは、^{あたまかたむ}頭を傾けました。おじいさんは、どうかして、このつぎには、百姓^{しやう}の気^きにいるくわを造^{つく}ってみよう^{おも}と思^{おも}いました。

「よくわかった。そのうちに、いいくわを造^{つく}っておきます。」と、おじいさんはいいました。

「お願い^{ねが}します。」と行って、百姓^{しやう}は帰^{かえ}りました。

おじいさんは、仕事^{しごと}にかかりました。

「どうか、みんなの気^きにいるように、おもしろく働^{はたら}かれる、くわ

ができるように。」と、鉄てつを焼やいたり、打うったりしました。このくわが、できあがった時じぶん分に、百しやう姓じやうが、やつてきました。そして、そのくわを手てに取とってみながら、

「なるほど、このくわは、いいくわだ。これなら、私わたしばかりでない。みんなの気きにいるだろう。」といって、持もって帰かえりました。

その後あとで、おじいさんは、「あのくわなら、悪わるいことはあるまい。」と、思おもっていました。

すると、一あるひ日ひ、また、百しやう姓じやうが、やつてきました。

「おじいさん、ほんとうに、困こまってしまいました。どういうものか、あのくわになつてから、仕しごと事ごとを怠おこたつて、話はなしばかりして困こまります。どうしたものでしょうか？」と、不ふ思しぎ議ぎそうな顔かおつきを

して、いいました。

おじいさんは、この話を聞くと、しばらく黙って考えていたが、

「なるほど、話のほうにばかり気をとられても困ったものだ。こんどこそ、きつと、いいくわを造っておきます。」と、おじいさんは答えました。

「よろしく、お頼みます。」と、百姓はいつて帰りました。

それからおじいさんは、仕事場にすわって、「よく土の掘れるように。」と、思いながら、鉄を打って、くわを造りました。百姓は、また店にやつてきて、くわをもつて帰りました。

「もはや、あの百姓は、なにもいつてきまい。」と、おじいさん

は思おもいました。

はたして、百しやう姓は、やっつてきませんでした。ある日ひ、顔かおを見み合あわすと、

「おじいさん、こんどのくわは、たいへんにいいくわで、みんなよろこ喜んでんじやういます。」といいました。おじいさんの店みせは、ますます繁は昌しやうしました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

初出：「小学少年」

1924（大正13）年4月

※初出時の表題は「お爺さんと鍬」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年4月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おじいさんとくわ

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>